

富山県舟橋村の 村民憲章策定に際しての富山大学の協力

■ 本学の地域づくり支援への姿勢 ～Community Engagement～

本学の地域づくり・文化支援センターは、2005年10月に県内国立三大学が統合された折、高岡キャンパスに発足した、誕生してからまだ目の浅い若々しいセンターです。本センターは、地域資源を生かした街づくりから文化活動支援に至るまで、地域社会の活性化と豊かな生活の醸成のお手伝いするため、大学内に留まるのではなく、地域との連携を積極的に進め、大学の成果と地域資源とを結びつける「地域のキャンパス化」を勧めたく、教員はもとより、学生が地域社会の方々と一緒に学ぶ機会をつくりたいと考えております。このような活動が、地域資源を組み合わせた地域活性プロジェクトの創出や、その核となる人材育成と共に、学生に基礎原理を見失わないで、実際に接することで現実的な知識を身につける機会を創出するものと期待します。

そのためには、本センターは、全学的な機関としての新たな地域作り支援、すなわち”Community Engagement”として地域ニーズを認識し、地域資源を生かした地域づくりによる地域社会の活性化を目指した「学外ネットワーク強化」「専門領域横断型学内ネットワーク構築」を展開しています。

■ 舟橋村村民憲章策定支援の概要

本学は、教育・研究と同様に、地域貢献を大学の使命として明確に位置づけた大学運営を行っております。この度、大学の地域貢献の一環として、舟橋村村民憲章策定に際し、住民ワークショップ運営への支援や憲章草稿案に対するアドバイスなど、地域の知的拠点としての大学の知的資源の活用に資する活動を行いました。本活動は、人文学部・松崎一平教授、経済学部・小柳津英知准教授、大学院医学薬学研究部（医）・立瀬剛志助教の協力を得て、**地域連携推進機構・地域づくり・文化支援部門**がコーディネート役を担うものであり、五福・杉谷・高岡の各キャンパスが連携した活動です。

■ 富山大学の協力に対する舟橋村の声

【ワークショップ参加者(役場職員)の声】



大学のイメージは、学内だけに閉じたイメージを持っていましたが、ワークショップを通じた富山大学との連携は、大学が敷地へと出てきたと感じ、これから村も大学の中に入り込み、連携によるまちづくりを行いたいと思います。

【ワークショップ参加者(住民)の声】



大学が参加するとの事で、身構えましたが、今回のワークショップでの富山大学との関係は新鮮でした。産学連携としての大学の存在は、学内での技術的な研究のみが対象であると思っておりましたが地域に積極的に出る事で学問が発展していく時代に変化しているのだと感じる事ができました。



ワークショップでのディスカッション風景



準備作業風景

■ 舟橋村村民憲章策定の協力経緯

- 8月下旬 富山大学への村民憲章策定への協力依頼
関係者会議（策定方針）
ワークショップ参加者公募
- 9月下旬 関係者会議（ワークショップ開催方法の検討）
- 10月初旬 運営会議の開催、ワークショップ事前説明会
- 10月中旬 舟橋村民憲章策定ワークショップ
- 10月下旬 舟橋村民憲章策定委員会 最終草稿案の報告
- 11月初旬 舟橋村議会報告、舟橋村民憲章の公表

舟橋村民憲章

風わたる稲穂の大地、水清く、立山をはるかに望む、
いとおいしいふるさと、私たちの舟橋村、
日本一小さなこの村の大きなあわせが、
いく千年もの時をこえて、未来へとつづきますように、

ここに舟橋村民憲章をかかげます。

1. 自然と遊べる豊かなみどりを育てましょう。
1. ひとりひとりが輝くように、自分の力を生かしましょう。
1. 世代を超えたやさしい暮らしをつくりましょう。
1. 小さなふれあいを大切に、大きなふれあいに広げましょう。
1. 温かい心が育むこどもの笑顔を守りましょう。

【舟橋村との地域づくりに関する協定の締結】

舟橋村が抱える地域課題の解決に向け、富山大学との協力体制を更に強化するため、平成20年2月15日、富山大学が舟橋村に赴き、地域づくり・文化支援センターとの間で、地域づくりに関する協定を結びました。

取り組みの経緯 ～突然の職員訪問、思いを具現化するために～

富山大学と舟橋村の協働による地域づくりの取り組みは、平成19年8月、舟橋村長の命を受けた舟橋村職員の村民憲章策定に際しての富山大学への協力依頼の可能性打診に関する突然の相談訪問から始まった。この取り組みは、行政ばかりでなく、舟橋村民にも取り組みの新鮮さとその成果が実感できたことから、このような取り組みを、舟橋村まちづくり事業の全般へと広く波及させるべく、平成19年度末に「富山大学・舟橋村における地域づくり包括連携協定」を締結した。協定締結は、富山大学と舟橋村における組織的連携による事業展開を推進し、平成20年度には試行的に協働型地域づくりへの挑戦し、以下の地域づくり実践に向けた制度設計を含む、仕組みづくりを行い、平成21年度は協働型地域づくりを本格的に展開していく計画で

住民の声

大学が参加するとのことで身構えましたが、ワークショップでの富山大学との関係は新鮮でした。大学は、学内での技術的研究のみが対象だと思っていましたが、地域に積極的にすることで、学問が発展していく時代に変化しているのだと感じることができました。

舟橋村、富山大学における姿勢

□日本一小さい舟橋村での協働型地域づくりの展開

舟橋村では、住民・地域・役場が協力し合って様々な取り組みや施策を実施する協働型地域づくりの実践に向け、「人と人とが協働してつくるむらづくりプロジェクト」を重点プロジェクトとして推進しています。なかでも舟橋村総合計画後期基本計画の推進における中核をなす事業テーマである「住民・地域・行政による協働型まちづくり」の実現を目指しています。この重点プロジェクトである協働型まちづくりを実践していくために、舟橋村では、富山大学と舟橋村の戦略的な相互協力関係を構築し、平成20年度より舟橋村の協働型地域実践に向けての制度設計、および仕組みづくりを展開しています。

大学の知と村の思いの融合

□富山大学の教職一体型による地域連携の実践

富山大学は、大学ミッションの第3の柱である地域貢献の実現に向け、全学的活動としての地域づくり支援(Community Engagement)を展開しています。この活動は、大学は学内に留まるのではなく、大学自らが積極的に地域ニーズを認識し、大学の成果と地域資源との交流を図ることで地域連携を進め、地域資源を活用した新しいビジネスモデルの創出、学生が実際に地域に接することで現実的な知識を身につける機会創出等の実践的活動を展開することです。中でも、地域活性プロジェクトの核心人材育成の取り組みに力を入れて実践しています。



舟橋村と富山大学の有機的な地域づくり実践の仕組み

□地域づくり包括連携協定 ⇒ 地域づくり連携会議

富山大学との協力体制をさらに強化し、舟橋村が抱える地域課題の解決に向け、平成20年2月15日に、舟橋村と富山大学（地域連携推進機構地域づくり・文化支援部門）との間で地域づくりに関する協定を結びました。この協定締結により、舟橋村との組織的連携による地域づくりを実践しています。



組織連携からシステム構築によるまちづくり事業の側面支援

□富山大学へ研究員派遣

□まちづくり協議会の設置

年度毎に個別事案を設定し、村民自らが企画から実施までを行う協働型まちづくりの推進組織として、まちづくり協議会を組成しています。H20は「ふなはしまつり」をテーマに、大学と役場とが準備会合（23回）を重ね、実態調査や住民自らが進行役を担うワークショップ開催等を行い、改善企画を立案しました。この改善企画は「長寿社会づくりソフト事業費交付金」の競争資金獲得につながり、舟橋村協働型まちづくりの礎を構築しました。H21は、温泉施設を利用した地産地消をテーマとした活動を行う予定です。



役場職員の声

大学のイメージは、学内だけに閉じたイメージを持っていましたが、ワークショップ通じた富山大学との連携は、大学が敷地へとでてきたと感じ、これからは村も大学の中に入り込み、連携によるまちづくりを行いたい。

□ふなはしまちづくり塾



舟橋村民の意識の芽生えを促し、次なる舟橋村協働型まちづくりの核となる人材発掘に向け、協働型住民育成のための勉強会として、ふなはしまちづくり塾を実施しています。H20は「協働型まちづくりとは」をテーマに開催し、H21は自治会・各種団体の活性化をテーマに開催する予定です。

住民の声

ふなはしまつりの歴史を学び、新旧住民交流に向けた新たな取り組みの必要性が明確になった。また、これまでの住民推進組織だけでの運営に対する限界もわかり、官民役割分担の再検討、推進組織強化などの必要性が明確化でき、次年度からの新たな企画立案ができた。

□議員研修、職員研修の実施

舟橋村のまちづくりの推進を下支えする舟橋村議員、および舟橋村職員のスキルアップを目的に実践的なテーマを掲げての研修を実施しています。職員研修については、H20は協働型まちづくりをテーマに開催し、H21は開催日を増やし、数年先を見越した事業構想立案を行う予定です。



役場職員の声

舟橋村は職員数が少なく、自らの仕事で手一杯であるが、立場を超えた考え方を共有できたことは大きな収穫です。とくに、協働型まちづくりを実現するための夢を、保育現場と役場職員が語り合えたことは大きな前進で、今後もこのような研修を行うことで、舟橋村の発展に向けて手を携えていきたい。

先駆グループ

協働者として実践

人材育成グループ

意識ある人が行動できる
能力育成

普及啓発グループ

意識を芽生えさせるための
人材育成

まちづくり協議会

舟橋村では、生活の充実と心の通う地域の実現を目指し、住民自らがまちづくりに参加し、個性的な村民プロジェクトに取り組んでいく「協働型まちづくり」を進めているが、その中核的な推進組織として「まちづくり協議会」を立ち上げた。

平成20年度は、「ふなはしまつり」をテーマとし、平成21年度のふなはしまつりの企画から運営までを協議していきます。

ふなはしまつりワークショップ

⑦ふなはしまつり、メインステージ

1 アンケート調査

【概要、目的】

調査実施日	平成20年8月2日（土）17～21時
データ収集方法	対面方式でのヒアリング調査にてデータ収集
	アンケート謝礼として「花の種」を配布
データ収集場所	ステージ左側、ステージ右側、 ステージ前テーブル席、夜店前3箇所
データ数	161票収集

- ・次年度以降の改善提案を行うための基礎データを収集。
（ふなはしまつりに対する来訪者の満足度や志向性）
- ・運営委員がアンケートを通じて参加者の声を聞いて、改善点や次年度に導入すべきプログラムを検討。



【結果（ポイント・課題）】

- ①30～40代が60%以上を占めている。
- ②回答者のうち、村内居住者が80%以上となっている。
- ③来訪目的は、「まつり全体を楽しむため」が50%となっている。
- ④開催場所・開催時期の准で最も満足度が高い。
- ⑤回答者の80%以上がまつり全体に満足している。
- ⑥回答者の90%が、次回のまつりにも参加したい意向を持っている。
- ⑦ご意見として、もっと参画したい（参加意向が多い）。
- ⑧協働型まちづくりという言葉を知らなくても、80%の人が関わって
いきたい志向を持っている。



▲アンケート調査

2 ワークショップ

【概要、ねらい】

- ①今年度のふなはしまつりを振り返り、「何が良かった（悪かった）のか、
なぜ良かった（悪かった）のか」を語り合う場づくり。
- ②これまでのまつりの変遷を紐解きながら、今後のふなはしまつりの運営方法
（組織のあり方、進め方、取り組み方）について語り合う場づくり。
- ③次年度以降の新たなまつり企画（プログラムなど）を考えることができる場づくり。



▲事前説明会

【内容】

I：村民勉強会 （ふなはしまつり塾）

【内容】

- ・舟橋村の目指すもの
- ・大学の役割と事例紹介
- ・協働型まちづくりとは
- ・まちづくり協議会のご案内

II：事前説明会

【内容】

- ・まちづくり協議会の目的、
内容の説明
- ・ワークショップとは何か、
進め方の説明
- ・ふなはしまつりの変遷と
今後について
- ・まつりアンケート集計の報告
- ・ワークショップ事前説明

III：ワークショップ

※A班・B班2班に分かれて

ふなはしまつりに関して
グループ討議

【論点】

- ・現状把握と課題について
- ・課題に基づく解決策
- ・討議内容の整理、まとめ
- ・まとめの発表

IV：最終報告会

【意見交換&感想】

- ・ワークショップ
最終報告について
- ・まつりパネルイメージ
- ・ワークショップを通じて
感じたこと
- ・パネル授与式

パネル授与セレモニー

3 アウトプット（今後の課題）

- ①運営側と参加側が一体となる“ふなはしまつり”を実践する。
- ②村民全員が舟橋村の良さを知り、世代間や新旧住民とのコミュニケーションギャップを
解消するプログラムを企画する。
- ③ふなはしまつりを通じて、村内の行政・企業そして村民一体化を進め、更には富山大学の
知見も借り、舟橋村そのものの新たなまちづくりを進めるきっかけとする。

●村民勉強会
（ふなはしまつり塾）



今後の協議会が目指すもの

- ★住民と行政が一体となって取り組む「協働型まちづくり」
実現のため、ふなはしまちづくり協議会を推進していきます。
- ★次年度以降は、よりよいまちづくりに向けて、住民のみならず
の声を聞きながら、さまざまなテーマに取り組んでいく予定です。

まつりの中身の勉強ができた。
青年部が参加できるかの不安がある
なか、今後、役割分担を明確にし、
運営委員会への参加メンバー
を増やさないといけない。



参加者の声

青年部の苦勞話が聞け、来年度、
メンバーを増やしているいろいろアイ
デアをだして、住民が一日楽しめる
ものをつくってきたい。